

史跡紹介

旧跡 因尾線・江平線

道路開鑿さく記念碑

今山水男

(会員本匠堂の間)

この記念碑は、佐伯市本匠字江平地区の入り口にある高さ二、七m程の記念碑です。

江平地区は佐伯市本匠大字因尾の奥まった所に位置します。

佐伯より県道

二二七号線、国

道一〇号線を経

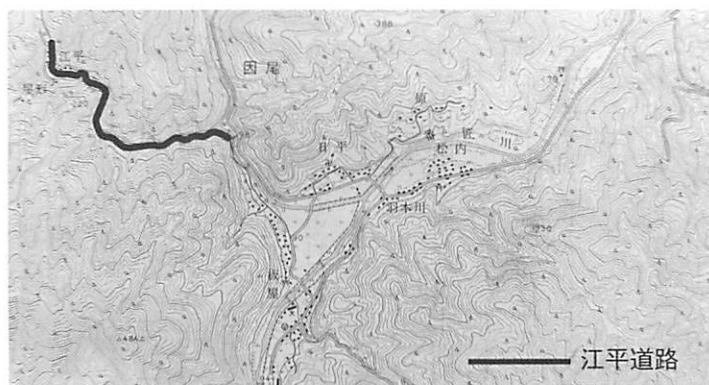
て、県道三五号

線(三重→弥生

線)を西進。廻る

こと三〇分あま

り。本匠地区日



平区に到着。これより野津方面に七〇〇m程進み左折、橋を渡って右へ谷川沿いに約一三〇〇m程進むと江平地区に着きます。

この地区の入口左側にこの記念碑が建てられています。

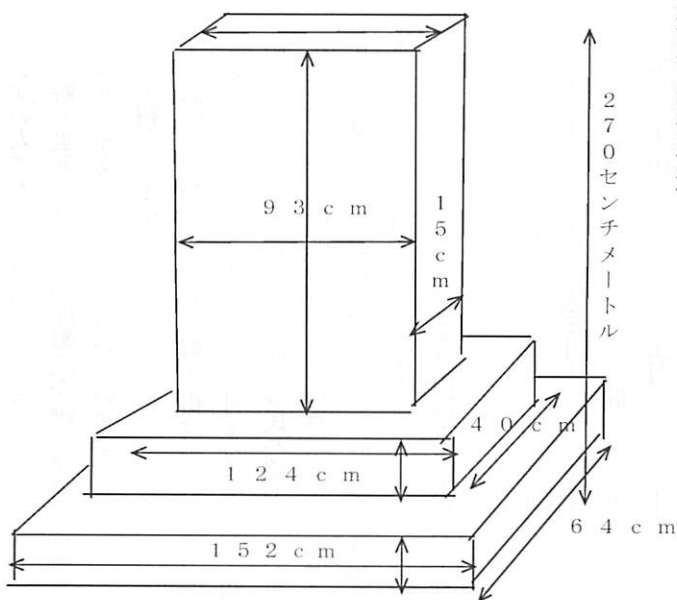
この道をさらに四〇m程進むと室町時代末期と言われ「石塔」に続く案内板があります。

ります。

今は、そこから山部地区土紙屋地区まで四m幅の林道が完成しています。そこから松葉・平原地区を通り

三二六号線で三国トンネル、豊後大野市につながっています。(現在、台風被害のため通行止め)

道路開鑿記念碑



碑の大きさは、上図のようになっていました。石材は灰石^{はいし}でした。



碑の表面には

「道路開鑿記念碑」と右から左に横書きされており、その下に、この記念碑を作成した時、寄付金を戴いた皆様の御芳名と金額が記してあります。

「因尾村一金一〇〇〇円」から金五円の方まで一六七名の名前が記されています。

因尾村の後に

は個人名と金額が記されており、金額も二〇〇円が二名、五〇円、四〇円、三七円、三五円、三〇円と続き、

一番少ない人でも五円寄附しています。

記念碑の裏面には「道路開鑿記念碑」建立の意義と目的達成が短文にまとめて書いています。

その文を紹介します。

「本道路ハ照宮成子内親王殿下御降誕記念トシテ開鑿ヲ企画シ、大正十四年三月工ヲ起コシ、昭和三年四月竣工セリ。其ノ間、部民ハ協力一致、昼夜具工ニ従イ、比較的短時日ニ功終ヘタルハ、偏ニ其ノ至誠努力ノ賜ナリ。聊カ記シテ、以テ、後昆ニ傳フト為ス」と記してあります。

その下に各地区別に寄付額五円以下の人数および

金額が記されています。

金七十九円五十銭	大字因尾	三十人
金六十円六十銭	大字井上	四十七人
金二十六円	堂の間	九人
金二十円	虫月	十人
金三十一円	上津川	十九人
金五円三十銭	山部	三人

金額の後には、御婦人の方から寄附された糯米の量と氏名が記されていました。

糯米の量は一升から一斗まであり、それぞれに量と氏名が彫りこまれていました。

一斗四名、五升四名、三升四名、一升五名の十七名の名前があります。

続いて当時の村長前任・後任の名前、開鑿勧誘者の村会議員・議会議員の名前が書かれています。

村長 梁井海老蔵(前任) 小野隆重(後任)

村会議員(開鑿) 柳井円治 柳井泉

議会議員 高橋弥十郎 高野倉蔵

河原 潔 菅原常次郎 甲斐富五郎

柳井慶蔵 川野市次郎

庶務会計 大友義雄

道路委員 大友今朝市(前伍長) 大友友太郎(伍長)

設計者 中島敬文

請負者 中島房治

石工 吉田宗太郎 後藤永太郎

裏面最下行には地元の方の氏名と寄付金額、工事助役人数が記載されています。

伍長 大友友太郎 寄付金五一〇円 工人二〇七人

前同 大友今朝市 同 三六〇円

大友頌太郎 工人二九七人

柳井太一 寄付金三六〇円 工人二〇二人

戸坂又五郎 同 二二〇円 同 一五七人

柳井吉蔵 同 三〇円 同 八六人

甲斐光太郎 同 一五円 同 九五八人

甲斐万蔵 同 九円 同 七〇人

柳井初治 同 六円 同 二五人

甲斐喜四郎 同 一一人

大友義雄 (庶務委員) 同 二〇二人

因尾・堂ノ間 同 四〇人

山士連中 同 四〇人

工費 金八〇五〇円

人工 千三百六十五人也

以上の事を碑文に記し、「後昆(＝子孫)ニ傳フト為ス」とありました。

大正十四年三月起工し、昭和三年竣工とあり、比較的早く開鑿されたものです。この偉業、二人の村長以下、村会議員、議会議員、地元の方々の村を挙げての一大事業に開鑿した辛苦努力がうかがわれます。

御婦人の方が糯米を沢山寄付していますので、開通式典には、村を挙げての祝杯、万歳三唱が声高らかに山々に響きあつたと思われれます。投げ餅拾いには近在近郷の人々も駆けつけ、大歓声のうちに終了したことでしょう。

当村の生活を支える主産業は木炭生産で、山林資源豊かな江平地区での道路開通は、何十倍もの労働力の改善に貢献したことでしょう。当時木製の車輪を付けた馬車が鉄製の馬車に代わり連日のように、この新設された道路を利用していたと思われれます。

昭和二十年以後も馬車が主体となつて山林資源である木炭を各地に送り届けた事でしょう。戦後の復興により馬車もゴム製のタイヤを持つものに変わり地域の発展に勤めました。因尾村は山林資源が豊富であり、先人たちは機械文明の乏しい時代に、このような立派な道路を開鑿した偉業に尊敬と感謝をささげます。

この工事の総経費八〇五〇円は、どの位の金額になるのか調べてみました。

江平開鑿記念碑が建てられた昭和三年は、世界的な

不況が次第次第に深まり、翌昭和四年にはニューヨークの株の大暴落（世界恐慌）が発生しました。

大正十四年、米一石（一五〇キログラム^二、五俵）が四一円六五銭だったのですが、全国的な不況で年々低下し、昭和四年には二七円に低下していました。

昭和六年には内地米が一石あたり一八円五九銭まで低下します。（大分県史・満州覚え書き参照）

私は昭和一八年に因尾の旭製箸工場（現橋本林産）に勤めていました。この時の日当が一円三〇銭でした。当時は玄米六〇キログラム一俵が一六円でした（一石あたり四〇円）。この当時の八〇五〇円です。莫大な費用だったことがわかります。一円の尊さが身にしみます。この事実を紹介し後世に伝えてもらいたいものです。

《参考資料》

・照宮成子内親王

昭和天皇と香淳皇后の第一皇女

東久邇成子。現天皇の長姉

○江平地区の民家と道路

